

日本語史からの千利休書簡

柏 本 雄 幸

定年退職と言うことで、春の公開講演会の講師にご指名くださり、名誉あることと感謝しております。

題目は、「日本語史からの千利休書簡」としました。千利休の書簡を通し、私が学んで来た室町時代の言語について話そうと思います。

資料には、桑田忠親著『定本千利休の書簡』（昭和四六年・東京堂出版）と、小松茂美著『増補版利休の手紙』（平成八年・小学館）を用いました。四四五通あります。茶掛けなどとして尊重されたため多く残ったのだと思います。

一

いきなり言語の問題に入る前に、利休について二つの事を話題にする。利休について興味を持ってほしいからである。

利休は、信長・秀吉の茶頭として召し抱えられ、秀吉に

仕えては側近として陰の力を發揮した。大友宗麟が国許の重臣に「宗易ならでハ、閨白様へ一言も申上人無之と見及申候」と書き送った。宗易とは利休のことで、利休以外には秀吉に一言も申し上げる人がいないと見受けたと言っている。しかし、それが災いしてか、秀吉に切腹させられ、一条戻り橋でさらし首の刑に処せられた。

切腹の原因については、利休の死後早くから所説あった。伊達家文書之二に上京していた鈴木新兵衛の手紙が所収されている。利休の木像の張り付けの脇に「色々ノ科共被遊御札ヲ被相立候、おもしろき御文言」と、利休の罪状が書き立てられていたことを伝えている。しかし、残念ながら「不可勝計候（あげてかぞうべからず）（一々書き上げることができないの意）」（五八七番）としている。

『国史大辞典』の記述によると、大徳寺山門楼上に利休の木像を安置すると言った不遜行為と、秀吉のお茶頭であり

ながら茶器の売買で不当な利益を得たことが表向きの罪状になっているが、陰では種々の憶測がなされた。その一つが、利休の娘で、万代屋宗安の後家であつたお吟を秀吉が側室に求めた、それを拒否したために不仲になったとするものである。しかし、真相は、石田三成一派との勢力争いの犠牲になったとされている。

野上弥生子氏は、『秀吉と利休』（新潮文庫）の中で、「唐御陣は明智討ちのようにはいかない」と、秀吉の高麗・出兵の野望を利休が批判したことを石田三成が聞きつけ、失脚に利用したと考えられた。

桑田忠親氏は、『定本千利休』（角川文庫）の中で、「天正十九年正月二十二日秀長没するに及び、好機逸すべからずとした反対勢力の圧迫をこうむり、連年の行跡もすべてが不利に解釈され、ことに木像事件によって秀吉の怒りを買」つたと考えられた。しかしそのすぐ後に、「なお、最近の私の考えでは」として、秀吉が天正十八年に「身分法令」を制度化した、士農工商の身分を分離し、位置づけるものであつた。その時、経済力があり、武士を武士とも思わない自由自治の気質を持つ堺衆が目障りであつた、その見せしめとして利休が処罰された。「要するに、利休は、秀吉の作つた封建社会制度の犠牲となつて死んだのである」

と、新しい考え方を示された。

小松茂美氏は、『利休の死』（中公文庫）の中で、直接の原因は、利休愛好の茶壺「天の橋立」を秀吉が望んだが、利休が手離さなかつた、それに政治的な思わくが絡んでの死であつたと説明された。

三浦綾子氏は、『千利休とその妻たち』（主婦の友社）で、クリスチャン作家として、また、小説という自由さの中で、後妻の「りき」と娘の「ぎん」をキリシタンと想定し、おぎんはキリスト教徒らしく操を守つて急死した。利休も段々とキリスト教に関心を寄せ、秀吉のキリシタン禁教令をきっかけに人生に疲れを覚え、秀吉の命令を従容として受け入れたと描かれた。早くから陰の原因とされていた、利休キリシタン説と、おぎん側室説を生かしたものとなっている。

最近の朝日新聞（一九九八年九月二十四日）に「秀吉・利休の対立描く」のタイトルで記事が出ていた。表千家で未発見の資料が出て来た、その中に江岑宗左（こうしんそうさ）（二六一九～七二）の書き残した「伝聞事」があり、利休切腹の遠因が記されていたとする。①秀吉は利休のつくつた一畳半の茶室が不満で二畳に改修させた。②利休が露地の外の白壁に植えた松の木を秀吉が撤去させた。③利休が門

の上に掲げた額が秀吉は氣に入らず、取り除かせた。こうしたことから対立が深まり、不仲になったと言うものである。江岑宗左は、利休から数えて四代目に当たる。父の千宗且は、十四歳で祖父利休の死に会った。十四歳であれば、祖父の死の意味は理解できた。その父からの伝聞であるから真実に近いものである。村井康彦氏も『千利休』(NHKブックス)で、茶室や黒茶碗にみられる美意識の違いや、心理的葛藤が原因であると考えられた。利休切腹の原因は、永遠の謎なのかもしれない。

利休についてのもう一つの話題が「代筆問題」である。

昭和四十六年に歴史学者の村井康彦氏が問題提起をされた。江岑宗左の『江岑夏書』に「又なるミと申物書在之候。今の御茶堂ノなるミ宗円ぢいニ御さ候事。利休代筆ハ大形なるミ手ニ候。」と、利休に「なるミ(鳴海)」という右筆がいた、一通であるが、鳴海代筆の書状も見発されたことで、話題になった。代筆有無を念頭に置かずに来た従来の利休の書簡研究に再考を求められた。桑田氏はご自分の「定本」を再吟味されたが、鳴海代筆は見当たらなかった、偽物と判定して掲載しなかったものの十数通それらしいものがあったと報告されている。

小松茂美氏も、「利休の手紙においては、代筆らしいもの

の伝存にはまったく気づかなかった」が、代筆問題から入念に鑑定した結果、六人の右筆と、四三通の書状がわかったと述べていられる。桑田氏が「世伝の一般的古文書が大体読める程度の経験では、利休や織部などの茶人の書は読めないし、まして真偽の鑑定は不可能である」(中公新書『千利休』、十年、二十年以上の体験の積み重ねが必要であるとされているが、古筆研究の難しさと奥深さが教えられる。

二

前置きが長くなったが、本題である言語について触れていく。最初に、語彙を取り上げる。日本語史のなかで揺れ動く語彙から問題にしていく。

(1) 「困る」

①従大徳寺、即今帰宅申候。困申候て、先々ふせり申候。されともをそなわり申候間、引木のさや持進上候。(小松154、細川忠興宛)

「引木の鞘の文」として有名である。床に臥せていたが、約束を思い出し、引木の鞘によく似た茶わんを持たせたと云うのである。この書簡の重要性は、利休賜死の一箇月前の書状で、渦中の大徳寺から帰宅していることである。桑

田氏は、「この利休文からは、何か、容易ならぬ予感をおぼえさせられる。大徳寺から帰宅したが、困却して、臥床している、というのは、あるいは、大徳寺山門の金毛閣に利休の寿像を掲げたことが問題化され、それに対する善後策を講ずるために、同寺の住職古溪宗陳和尚と相談したが、どうにもならず、懊悩のあまり、帰宅して、床にふせつた、という事情を知らせたものではなからうか」（定本589頁）と推測された。村井康彦氏も、「桑田氏が推測されるように、そこに何か容易ならぬ事態の発生を感じしめる」（千利休239頁）と同意見である。

小松氏はそれに疑問を持たれた。この書簡の七日後に、同じく忠興にあてて「生貝のあぶり貝」を貰った礼状を出している、それには深刻さは見られず、「一笑く」などとふざけている。「困る」には「疲れる」の意味があるので、単に疲れたと言ったのであろうと理解された。「困る」については、柳田征司氏の研究がある。

キリシタンが出版した『日葡辞書』（一六〇三）によると、

② Comari.u, attā.（籠・込まり、る、った）入り込む、または中にある。

「込める」の自動詞であって、困惑するの意の「困る」で

はない。室町時代の漢和字書である節用集類によると、

③ 「困^{クルシム}」（運歩色葉集、易林本）「困^{クルシム}（疲勞スル義也）」（文明本）「困^{クワシム}」（饅頭屋本）「困^{クワシム}」（黒本本）「困^{クルシム}くた^{クルシム}びる・くるしむ・つかるる」（落葉集）

「困」を「こまる」と読ませた例は見当たらなかった。「くるしむ・くたびる・つかるる」と、肉体的疲勞を意味する読みがあがっていた。

利休書簡に「困」の字が使用されている手紙がほかにもある。

④ 御困^{クルシム}なをされ候て、不図遊山に上洛、待申候。（桑田157、宗伝老人宛）

⑤ 今朝客人候て困、又はれ物に養生申候。晩に可申承候。（小松174、芝山監物丞源内宛）

⑥ 従是可申入処に結句御報二罷成、迷惑申候。夜前御困^{クルシム}刻、思食立忝候。（小松249、前田利家宛）

三通が見られた。例④の書簡は、博多の数奇者宗伝にあてたもので、追而書に「返々御辛勞事海山にて候」と、何か疲れることがあって、それを慰勞した文言が記されている。「御困なをされ」とは、お疲れを回復されての意で、「困」は疲勞と解釈してよからう。

用例⑤の「困」について、小松氏は「手順が狂って困っ

たと解釈された。「又」の接続詞に注目すると、「困」は、はれ物同様に養生の必要なことを考えられる。疲労と解釈してよからう。用例⑥の「困」には、具体的な手掛かりがない。茶会が終わった後に利家から御札の手紙が送られて来たのであろう。それに対して「夜前御困」なのにお手紙をくださりと謝意を表した。「困」は、お茶会での心遣いを慰めたものと思う。「困」は、疲労と解釈するのが自然であろう。

⑦ 〈利休儀はさきへのほり可申候へとの御状があつた〉
如此にて我等御城へ参上、明朝上洛申候。今に〔一筆
ニ〕小松くたひれ申候ま、代筆にて申候間、不及返
事候。(桑田250・小松208、織部など八名にあてた文)

⑧ 乍去、帰申候て返事にくたひれ申候間、細章〔細筆〕
小松をさしおき申候。(桑田249・小松63、羽柴下総介
滝川雄利宛)

「くたびる」が何もしたくない程に疲労困ぱいを意味するの
に對して、「困」の方は、「御」を冠して相手の労をねぎらつ
たりしている。現在の「お疲れ」とよく似ており、「疲るる」
と読んだかと思う。「困」を「こまる」と読み、困惑を意
味するようになるのは、江戸以降である。

(2) 「自由」

① 先度者、政宗様御札御持参、恐悦候。又為貴老御土産、
隔子之袖袴端、祝着二候。尤参候て雖御札可申候、老
足乍自由可有御免候。(先度は、政宗様御札を御持参、
恐悦に候。また、貴老の御土産として格子の袖一反、
祝着に候。尤も参り候て、御札を申すべく候と言えど
も、老足、自由ながら御免有るべく候。)(小松87、あ
て名不明)

② 政宗公、唯今御尋之事、外聞忝次第候。抑、御太刀一
腰、馬代金拾両拝悦、是又過分。……乍恐、御札令不
参候。御存旨、貴所政宗様へ被仰上候者、可為本望候。
拙者相似自由、令迷惑候。(……恐れながら御札不参
せしめ候。御存じの旨、貴所政宗様へ仰せ上げられ候
わば、本望たるべく候。拙者相似の自由、迷惑せしめ
候。)(桑田243、木村弥一右衛門宛)

「相似の自由」は、「自由に相似」と訓読してよいかと思う。
「自由」の解釈であるが、小松氏は、「老足で歩行もまま
ならぬので」「足が弱つて不自由なのでお許しください」
と解釈されている。「乍自由」を「乍不自由」のつもりだ
と理解されたようである。室町時代の「自由」には、書き
言葉と話し言葉とで意味が違っていた。話し言葉では、

③ Jiyū。ジユウ。自由。例。Jiyū jizami furumō。(自由自在に振舞ふ) 自由に意のままに行動する。(日葡辞書)

④ 人の下人として主君の前で自由に物申す事も、はばかりなれば、この座に我が主シヤントのござる事なれば、ほしいままに申されぬ。(天草版イソポ物語427頁)

⑤ いやまことにうとく〈有徳〓金持〉な人て、じゆうな事でござる。万正も致す物をそのまゝ、かふ〈買う〉て参れと申付られた。(虎明本狂言「粟田口」)

現代語と同様に「心のおもむくまま。好きなようにすること。」の意味である。

しかし、書き言葉になると、意味が違ってくる。

⑥ 恣称罪科之蹟、私令没収之条、甚以自由之到也。甲州法度之次第。(甲陽軍鑑品第二) 〈ほしいままに罪科のあとと称し、わたくしに没収せしむるの条、甚だもつて自由の至りなり〉

⑦ 無意趣而嫌寄親事、自由之至也。甲州法度之次第。(同右) 〈意趣なくして、寄親を嫌うこと、自由の至りなり〉

⑧ 遂毎年実檢之節、敢えて以て自由の依怙を存すべからず。(庭訓往来三月往状)

「自由」の対象となつてゐる事柄は、罰則だと言つて他人の物を私的に取り上げたり、主人に当たる人を理由もなく嫌つたり、年貢の査定に依怙鼻息したりすることである。

「自由」とは、氣まま勝手であること、好き放題にするこの意で、許されない、悪い事なのである。

書き言葉の「自由」で利休書簡を解釈すると、用例①は、「お目にかかつて御礼を申すべきであつたが、老足ゆえ、身勝手ながらお許しください」となり、用例②は、「病氣のためお礼にも伺わなかつた。身勝手なようで恐縮しております」となる。自由にはそのような二面性があり、現代語でも「自由氣まま」と言えば、悪い方の自由になる。

(3) 「氣の毒」

「氣ノ毒ナ」についても柳田征司氏の研究がある⁽²⁾

① (井勘兵へ殿を) 少御見廻可申と存候処に、大坂よりノ客人に一円無隙候て、キノどくに存候。能様に御心得候て可被下候。(桑田56、古田織部宛)

② 及晩候て御出候へく候。一服可申候。あらきのとく、いそかハしさ、陽にても葉にても無之候。うき世のすきハい計候。(桑田234、数中斎数内紹智宛)

「氣の毒」というのは、休む隙もない程に多忙な自分に対し

て用いられている。現代語のように他人に同情して「気の毒」というのとは違っている。体や心を痛める毒のようなもので、つらいと悲しいの意である。「気の毒」に対して、「気の薬」という言い方もあった。

③ やい／＼ 太郎くわじや、やれ／＼きの薬な者をおいてきた、某が目のはたらくやうに、ちらり／＼した。(虎明本狂言「鼻取ずまふ」)

④ これはどのなぐさみはあるまひ、気のくすりじや。まだよふ(呼う)であそばふ。(同「栗田口」)

新しく雇った者が、気の利いた、愉快な者なので、心の慰みになることを「気の薬」と表現している。「気の毒」は、まさに心の毒である。そして、「気の薬」との対応からすると、「気の毒」は、「気の」「毒」であって現代語のように一語にはなっていない。また、「気の毒」は、日葡辞書にも載っていない。室町時代の資料にも使用例がない。利休は、ユーモアがあり、言語センスの豊かな人物であったかもしれない。

(4) 「迷惑」

「気の毒」に関連して「迷惑」に触れておく。現代語の「迷惑」は、「迷惑行爲」のように邪魔になって、わずらわ

しくて困ることを意味している。室町時代は、「Meiuacu. (迷惑) 苦惱、あるいは心を痛めること」(日葡辞書)とあって、心を痛める真剣な行爲である。

① (舞陽は)ただ田舎のいやしきにのみなら(ッ)て、皇居になれざるが故に心迷惑」と申ければ、(覺一本平家物語・五)

舞陽は田舎者で、こんな立派なものを見たことがなく、心が錯乱して正気ではないと述べている。「迷惑」の字義どおり、心が迷い、惑っているの意である。

② 或る時狼喉に大きな骨を立てて迷惑ここにきわまつて、(天草版イソポ物語)

心の錯乱から苦しみに変わっているが、どうしてよいかわからないという「迷惑」の原義は生きている。

利休書簡には「迷惑」の語が多く用いられている。一つは、御礼の挨拶としてである。

③ ^{それ}五徳御礼、承候、迷惑此事二候。(小松186、松井佐渡守康之宛)

④ 先度、為御礼尋由を、浜申候。迷惑仕候。(小松188、一任斎宛)

礼状や訪問に対して謝意を述べたもので、恐縮しております、御厚情にかえって心が痛みますと伝えている。

二つめは、詫びの挨拶である。

⑤急度御風炉のかた切、進上可申候。あまり延引申候条、先一筆申候。迷惑仕候。(桑田122、石河伯耆守数正宛)

⑥御かま結句そこね申候て御存分二ハ不申付候事、迷惑御事候。(桑田70、柘植左京宛)

⑦大徳寺作事、内々今日より大工申付候。然者、藤五郎事御作事二指合^{さしあひ}可申かと存、迷惑仕候。(桑田217、あて名不明)

事柄の延引、不出来、指合など相手に対して申し訳無い事をした事を詫びたものである。「御迷惑」と敬語が付けば、現代語と変わらない。しかし、これらの語は、相手への迷惑ではなく、自分が心を痛め、恐縮していますと伝えたもので、現代語の「迷惑」とは相違している。

三つめが、不愉快、困るの意味である。

⑧唯今は、初花近日徳川殿より来候。珍^{めづらし}唐物到来二候。我等かたへは不珍候。年来二迄、様々迷惑^{めいわく}迄に候。(桑田42、小松21、島井宗叱宛)

⑨近比迷惑なる事承候て、久しく山崎に逗留候。(桑田37、藪中斎藪内紹智宛)

「初花」という舶来の茶入を家康から贈られ、秀吉は大喜びだったのであるが、利休にとっては珍しくもない、迷惑

だというのである。「不愉快」は言い過ぎかもしれないが、面白くないぐらいの気持ちであろう。用例⑨の迷惑内容は具体的にはわからないが、文面からすると、やはり面白くないことであつたと思われる。これらの「迷惑」は、他人から受けた嫌な行為を指しており、現代語に近くなっている。室町時代としては、早い例である。

(5) 「無心」

現代語の「無心」は、「無心に遊ぶ」「無心を言う」のように「無邪気」とか、「金品をねだる」ことを意味している。室町時代の日葡辞書には「樹木や石などのように、無生非情で感受能力がないこと」と、「ある人が相手に対して、何か物を所望したり、何事かをしてほしいと頼む際に、当然感ずべき羞恥心、抵抗感」と説明されている。「無心」とは、感受能力無しとか、恥ずべきことの意味で、ずいぶん悪い印象の言葉である。

①無心の草木もこれを随喜して、時ならず花を開き、(土井本太平記、卷二四)

②以前の主人は無心の枯木でござれば、しかるべい主人を与えて下されい。(天草版イソボ物語)

③雲ハ日二千里、京ノ方ヘ吹去ヘシ。サレトモ無心ナホ

トニ……別ノ是ホトニ哀事ヲハ知マイソ。(蒙求抄、一
26ウ)

④酔テ帽シテ机上ニ落タソ。頭ヲ以テ帽ヘ入レテキル。
手テハ取ラヌソ。無心ナル体ソ。(蒙求抄、六28ウ)

草木や酔払いで、感受能力や知性の無い事を意味している。
日葡辞書が言うところの、何かを頼む時のずうずうしさを
示す「無心」は見当たらなかった。しかし、利休書簡では、

⑤近頃御無心之事に候へ共、半介方より茶壺可參候。

……忝、忝つほとおかれ候て可 給候。(桑田17、滝本
坊宛)

⑥松原沼通跡の借物事、近日相済申候様に急申候。近
比御無心、無是非候。(桑田45・小松57、宗話老人宛)

⑦返々少将殿へ御無心之事、御礼頼 申候。(小松235、
末吉藤次郎宛)

いずれも「御無心」とあるように相手への厚かましい御願
い事を意味している。一般の資料に見られなかった用法が
利休書簡に見られた。「庭訓往来」にも用いられているので、
書簡、つまり書き言葉の用語であったのかと思う。

(6) 「ふべん」

①むらさきのもんせんにて、きやうへとをく候てふへん

二候へとも、人のいんしんすくなく、これかよく候
〔忝かるへく候〕小松〕。(桑田28・小松16、末吉勘兵
衛利方宛)

京都の新居は、紫野の大徳寺の門前であるので、京都市内
へは遠くてふへんだ。しかし人の出入りが少なく、その点
は感謝だと伝えた手紙である。「ふへん」は、「不便」であ
り、便利の悪いことを意味している。しかし、節用集類を
調べると、フベンは「不弁」、「不便」はフビンと読まれて
いる。しかも、

②「(不)辯不足義也」「(不)便 悼意」(文明本節用集)
フベンの意味も、便利が悪いではなく、物や金の足りない
ことを意味している。日葡辞書で確認すると、

③ Fuben. フベン、Tarauazu (足らはず) 知識であれ、
宝物、家財の何でもあれ、それが不足し、欠乏してい
ること。

Fubenjin, I fubenxa. フベンジン又は、フベンジャ。貧
しい人。とばしい人。

Fubenna. フベンナ。すなわち、Benno canaanufito。
(弁の叶はぬ人) あまり能弁でなくて、十分に述べる
能力のない人。Fubenna chiyε. (不弁な智慧)。浅くて
不十分な知恵。

④ Fubin. フビン。すなわち、Itanaxi. coto (いたはしいと) 憐憫と同情。『Fubin xigocuna cotogia. (不便至極な事ぢや) それは深く同情すべき哀れな事である。文明本の「不足之義也」と「悼意」のとおりであることを証明している。実例を見ても、

⑤ 米錢持たる分限者にはよき屋敷を渡し、不弁なる者には造作の入所をくれ、何に付てもさかさまに事を仕置しおき、(甲陽軍鑑第三二)

⑥ い〈行〉ていはふずるは、ふべんなる所を見せてはづかしうこそあれ、さりながらかんにんせられうならば、随分ふちをせう。(虎明本狂言「今参」)

金銭的に貧しい事を意味している。

しかし、抄物関係の資料を見ると、現代語に通じる「ふべん」が表われる。

⑦ 我夫ハソコニイタソ、旅宿ノ不弁ナ処ニ居ラレタ程ニ、トモくニウサヲモ語リタケレトモ、カナワヌ程ニ、心ノ委曲ヲイヨく是ヲ乱ルソ。(毛詩抄、六25オ)

⑧ 田舎ヘ下サル、ハ、不弁ナト云心ナリ。(蒙求抄、七16オ)

⑨ アヲミヲ取テ、刀テホリツケテ、牛ノ皮テアムソ。マキ本ニスルハ是テ候。ヨアウテクルくト巻テヲイタ

ソ。今ハ不便サニ大概雙紙ニスルソ。(蒙求抄、五13ウ)

⑩ イカニ兵符ヲ合セタリトモ、時ノ便不便ニヨリテ、不用ハナントサシモウソ。(史記抄、十一29ウ)

⑪ 智勇共ニ其人ナイテハナイソ。形不利勢不便也。只秦ノ地形カヨイニヨツテ、二万カ百万ニアタルホトニ、勢モ諸侯ノタメニハ不便ソ。(史記抄、四58ウ)

憂さ晴らしでもしたくないような不弁な旅宿、田舎という不弁な所、軸物は不便なので綴物にするという訳で、「不弁」「不便」ともに「便利が悪い、不都合だ」の意である。「不足、不如意」が、「不都合、不便」に変化したものと思いが、新しい意味である。利休もそうした新しい意味で用いたのである。

以上は、現代語を視点に置いて室町時代の語彙を取り上げた。その中でも、いくつか利休の特徴的なものに触れた。次は、利休に視点を置いていくつかの語彙を取り上げてみる。

(7) 「手前」

「点前」とも書き、茶の湯を立てる作法を意味する事が多い。「手前」の原義は、「手の前」つまり自分に近い所の意

である。やがて自分の範囲、自分の管理、所有するもの、具体的には、腕まえや暮らし向きを意味した。また、自分に近い所から一人称の代名詞としても用いられた。

少し長くなるが、日葡辞書を引用しておく。

① Tenaye. (手前) ある人に属していること、または、

関係していること、または、人のなす仕事。¶ So-
natao temayegia. (そなたの手前ぢや) この仕事はあ
なたに属することである。または、今度はあなたの番
である。¶ Tenaye isogaxi. (手前忙しい) 自分の仕
事が用事かで手を取られている。¶ Temayega naranu.
(手前がならぬ) ある物を手に入れる資力が無い。

¶ Tenaye docu. (手前得) ある人が自分の責任のも
とに引き受けた仕事、あるいは、請負仕事であつて、
自分の好きな時にその仕事を片づけることができ、そ
れ以上何の義務も負わないもの。¶ Tenayeni canega
nai fodon casaxerarei. (手前に金がない程に貸させら
れい) 私は今お金を持っていないから、貸してくだ
さい。

自分の仕事とか、自分の責任、自分の手許の説明はなされ
ているが、茶の湯を立てる作法については何らの記述もな
い。利休書簡の「手前」はどうであろうか。

② 今度遙々雖御上洛候、手前に取紛、無音申候処に、
(桑田 178、味閑斎宛)

③ 花入之事、出来仕候へ共、手前何角取紛、延引申候。
(桑田 126、惣十郎宛)

④ 手前に取乱、無音申候。透に一服可申候。(桑田 165、
宗通老人宛)

⑤ 手前取乱、其後以書状も不申候。(桑田 157、宗伝老人
宛)

全部で十四例あるが、そのうち十一例は、②～⑤のように
「手前(に)」取紛「手前(に)」取乱」となっている。具体
的には、茶の湯を立てることを指すのであろうが、表現と
して自分の仕事で忙しかったと無沙汰のお詫びをしている。
表記にも「点前」は見られない。

⑥ 関白様御手前ニテ御茶立

同六月七日朝、宗易茶湯

(桑田 110、榊原小平太康政宛)

⑦ 二之宮様、近衛様へ御口切に、ふと御手前、弥可為御
苦勞候。(桑田 218、三宅玄蕃宛)

この二例の「御手前」は、明らかに茶の湯を立てる作法を
言い表わしている。他に類例を見出し得ないので、推測の
域を出ないが、「御手前」で点前を意味するというのは、

「御手前」が特殊用語であつたのであろうか。つまり「御」は尊敬語というよりも、茶の湯を立てる作法を大切にしたり美化語ではなかつたかと言うのである。現代語でも点前よりもお点前と言うのが通常のものである。「御手前」という言い方で、現代語のように茶の湯を立てる作法を言い表わしていた事は確認された。

もう一例の「手前」は、

⑧御釜、新キ釜。菊の文、手前二四ツ、ウシロ二四ツ。

(桑田85、春屋和尚宛茶会覚書)

ウシロに対する前方の意の「手前」である。

(8)「うてぬ」

①昨日御樽、仕合一たんにて候。さりとてハ平野一番と申度候へとも、大かた日本にてもうてぬしつけ者と可申候。(桑田58、あて名不明)

「しつけ者」とは、*Xitq̄uxexa* (躰者) 礼儀正しい作法をよくわきまえている人(日葡辞書)の意で、しつけの行き届いた、立派な人を言い表わす。しかし「うてぬ」については、日葡辞書にも各種の国語辞書にも載っていない。

抄物資料に次のような例があつた。

②君子(襄公のことをいう)ノ朝廷カラ帰り来ラル、時

ニ、天子カラ衣服ヲ下サレタソ。此衣服ハ徳カナウテハ一向似合ヌカ、此人ニハヨウ似合タト云心ソ。……
(此人は)諸侯ニナツテモウテヌ人チャ。赤面ナ人ソ。
……キヨウコツカラ(器用骨柄)誠ニ秦ノ君ト云テウテヌ人ソ。(毛詩抄、六30オウ)

「徳」の有る人、「誠ニ秦ノ君」からすると、「うてぬ」は、人柄を誉めた言葉である。匹敵する者がいない、誰にも負けない立派な人の意である。下二段活用「打つ」が語源ではないかと思う。

③(大力の朝比奈は)もんのとびらに手をかけ、ゑいやとおせは、……八本のかうりやう(紅梁)もおれ、くわんぬきとびらおしおとし、内なるむしや(武者)は三十騎ばかりおしにうてたりしは、そのま、すし(鮓)をしたるがごとくなり。(虎明本狂言「朝比奈」)

「うて」を「打たれて」とした台本もあり、下二段の「打つ」の可能性が高い。したがって「うてぬ」が一語の熟語であつたかは疑問であるが、口語性の強いものであつたらう。

(9)「いかる」

①せいしものつ、御花いかり申候。但、わきのはしら二かかり候。(小松210、茶会記)

「青磁の筒の花入れにお花がいかり申候」と述べたものである。日本国語大辞典によると、「醒睡笑」の例があがっている、

②しもつけの花のいけたるを見つけ、きつと手をつき、

「この野州はよう活いかりまゐらせたよ」(咄本・醒睡笑

一三)

意味は、上手に、あるいは美しく活けてあると、その状態を言い表わしたと思われる、日本国語大辞典では、他動詞の「いける」に「らる」の付いた「いけらる」を語源に考えている。「いけあり」の転とは考えられないものか。いずれにしろ、利休書簡には口語性の強い言葉が含まれていることをここでも知られるように思う。

(10)「きんす」

①(手桶の)足ノひろさ、以前申候た、ミの目二ツの内にあるほとにて候。ぬり又惣のなり、いかにもよくきんせらるへく候。(小松2、喜□あて)

これも難解な語である。小松氏は「きんす(欵す)」を当てられ、「うやまう・つつしむ」の意と解釈された。問題は、その使用例が見つからないことである。苦慮されたであろうことはよく理解できる。「きんず」と解釈した場合

① Gūnī, zuru, iia。(吟ず、ずる、じた) 自分で味わい、思いめぐらしながら、詩句を繰り返して誦する。(日葡辞書)

② 絃歌ハ、楽ニ雜テ吟スルヲ絃歌ト云ゾ。(史記抄、十52才)

③ 酒ヲ飲テアソフソ。毛詩ナトヲ吟シテ帰ソ。(蒙求抄、三2才)

④ 男一「びしやものの、ふくありのみと聞からに」男二「くらまぎれにて、むかでくひけり」男一「一段とできた、いざさらは吟じてみう」《二人同音ふし》(虎明本狂言「連歌毘沙門」)

⑤ いやいやそのてうし(銚子)の事ではなひ、調子をぎんずるといふて、うゝ、などといふをてうしをぎんずるといふ。(同「音曲簪」)

「きんず(吟ず)」とは、詩歌を歌うことである。利休書簡の「きんせらる」は、「念を入れて判断する、吟味する」の意に近いので「吟ず」では整合しない。

しかし、虎明本狂言に一例のみ次のような例があった。

⑥ 船頭「定而御酒(おんめ)など一段と念をいつたでござらふ」
「中々、随分きんじた酒でござる」(「船頭簪」)

「念をいつた」に対応して「きんじた」と答えている。念

を入れて選んだ、吟味したの「ぎんず」と見てよからう。
念のため「吟味」を調べると、

⑦ Guimi. (吟味) 味わうこと、または、味をためして
みること。また、分別と意志とで、物事をよく味わいなが
ら考えること。(日葡辞書)

⑧ 周郊カ詩ノ清絶ニシテ雪風ノ如ナルヲ吟味スレハ、齒
モ冷シテ凍カ如キソ。(四河入海、十一ノ二四ウ)

味をたしかめてみることのほかに、物事を念を入れて調べ
る意がある。「吟味」と関連の深い語であろう。あまり用
例のない語がここにも見られる。

(11) 「町ありき」

① 御書中得其意候。町ありきをと津隼より立候て約束申
候。早々帰可申候。てまハ入申ましく候。(小松107、あて名
不明)

日本国語大辞典によると、

② 本立も随分ひそかに町ありきして、人しれず逗留いた
せしに(浮世草子・武家義理物語一・二)

③ 町あるきの次にも立より、(仮名草子・是樂物語下・

三)

江戸時代の用例が挙げられている。利休書簡は、「町あり

き」の用例としては、早い例で、貴重なものと思う。「町あ
りき」とは、繁華街を歩きまわること、小松氏によると、
桃山から江戸初期のころの流行であった。町ありきのほか
にも、

④ 嬉しき物(略)町買^{まちがひ}の堀出し^{ほり}。(仮名草子・犬枕)

⑤ 春の都の町くだり、わきて長閑なる人の風俗(浮世草
子・好色万金丹一・二二)

⑥ 町まはりして帰るさに、(浄瑠璃・出世景清一道行)
繁華街を中心とした流行があつたようだ。色々の新語とし
て誕生している。利休の気取らない庶民的な人柄を忍ぶ思
いがする。

以上、利休に視点を置いていくつかの語彙を見てきた。

利休は、妙喜庵の功叔和尚や大徳寺の古溪和尚などの親
交が深く、豊かな学識を持ち、きちんとした文章の書簡も
残している。その一方で庶民性豊かな気取らない言葉遣い
を垣間見させてくれているように思う。

利休書簡の気取らない一面として、人名呼称の略称につ
いて簡単に触れておきたい。

A(一字十公) 秀公(羽柴秀吉)、越公(細川越中守忠
興)、筑公(羽柴筑前守前田利家)、忠公(蒲生忠三郎
氏郷)、牧公(牧村兵部大輔利貞)、新公(細井新助)、

古公（古田織部）

B（二字＋様）関様（関白秀吉）、秀様（羽柴秀吉）、中

様（羽柴中納言秀次）、与様（細川与一郎忠興）、弾様

（浅野弾正少弼長政）、休様（千利休）、輝様（毛利輝

元）、松様（松井佐渡守康之

C（二字＋もじ）与もじ（細川与一郎忠興）、越もじ（細

川越中守忠興）、忠もじ（蒲生忠三郎氏郷）、筑もじ

（羽柴筑前守前田利家）、飛もじ（蒲生飛彈守氏郷）

江戸時代になると、「金公・作公」（浮世風呂）は、仲間を

やや軽蔑した呼称、「亀さん、幸さん、又さん」（浮世風呂）

は、子どもに対する親愛の呼称、現代語の「さっちゃん・

けいちゃん」に通じるものである。「徳様」（曾根崎心中）

は、遊女が馴染客に使う呼称である。利休書簡の場合、フ

ルネーム呼称に対していくらか敬意は下になるが、それ以

上に親愛の情の深さの増す呼称と言える。失礼な呼称では

ない。

まず「もじ」呼称であるが、女性や子どもの呼称に用い

るものである。細川忠興に対する「与もじ・越もじ」は、

父の細川幽斎や細川家の家老松井康之への書簡に用いてい

る。子どもに対する愛情を示した呼称と言えよう。前田利

家とは十五・六歳しか隔たっていないので、まじめに子ど

も扱いをしたとは思えない。ユーモアを交えた呼称と考え

る。

次に「公」呼称である。推測の域を出ないが、「醒睡笑」

を見ると、「信長公・秀吉公・義政公・頼朝公・武田信虎

公」と省略しない呼称の中で二名に対して、

① 祇公、周防の山口へ下向ありつれば、（巻一・二五）

② 宗祇と宗長つれだち三井寺を見物の時、宗長のいへる

やうは、「略」とあれば、祇公、「略」と候ひ

しに、（巻八・四）

③ 詩をつくつて酒を買はれたる廬山の遠公にも、心ざま

似たり」といとはしがり、（巻五・四二）

連歌師の宗祇と廬山の恵遠に略称を用いている。数奇者、

文人に対しての尊称ではないかと思っている。相手を敬愛

した呼称である。

「様」呼称であるが、利休を「休様」と呼んだのは、長

男の紹安が弟の少庵に対して、自分の父のことを呼んだの

である。宗易で呼ぶならば、「易様」となることであろう。

恐らく、日常会話で、ごく親しい者同士の間では「関様」

「秀様」と呼んでいたのではなからうか。本人に対して用

いたとは思われない。こうした呼称の中に利休が書状に込め

④昨日壺之事、扱くも、とかくうつもしと令存候。御心底奉祭候。(小松133、牧村兵太宛)

「うつもし」とは、心の晴れない状態の「鬱々」に文字詞を付けたものである。女房詞であつて、男性が使えば教養がないと笑いものになる。牧村兵太に壺の代価の事で面白くない事があつた、相手の心底を察して、おどけて見せたものである。やさしい心遣いであろうか。

語彙について、このほかに次のような語彙も取り上げたかった。列挙するにとどめる。

①夜前貴所之御手くち一段あかり申候。(小松260、加周老人宛)

②従良意公、為御音信の十たわら、何よりの調法きとく、今日物鉢にて候。(小松134、川端道喜宛)

③たふ(太布)のあせぬくい五ヶ、珍敷物鉢、かやうのを見申候たる事無御ざ候。(小松246、あて名不明)

④今夜三色贈給候。ミな新物、明日申入候て晩に賞翫可申候。(桑田16、川端道喜宛)

いずれも室町時代の資料に見出すことのできない語である。江戸時代になって用例が見られるものもある。利休書簡用語の特徴を表わすかと思うが、説明できなかった面もあり、割愛した。

三

この項では、文法について取り上げる。問題となる事項は多くない。

(1) 接続詞「さまでも」

①肩ツキ、一段見事候。御秘蔵尤に候。将又、此方俳諧無之候。茶湯をさへ、入津申候て不仕候。かしく。

四月晦日 易(花押)

さまでも、今日卯月なこりを仕候。きこへかたく存候。

ほと、きす聞程のことうきよかな。

(小松128、小島屋道察宛)

全文を記した。肩衝の茶入を賞讃した後で、当方は、俳諧も茶の湯の会もする余裕がないと伝えた。その追而書で「さまでも」今日が四月の終わりなので名残りの茶の湯をし、俳句を読んだと書いた。「さまでも」は、「それでも」に近い表現である。しかし、逆態の接続詞に「さまでも」は存在しない。「さまでも」は、「それほどまで」に当たる副詞であり、「さまでも」は打消の言い方を伴い、「それほどではない」を意味する。しかし、「さまでも」の表現は、口語からは消えて行き、抄物類や狂言集などでは、「さほど」が

用いられている。「さまで」の例を挙げる。

①サレバ兵衛佐十万余騎トハキコユレドモ、サマデノ事ハヨモアラジ。(延慶本平家物語、三末)

②城にこもるところの官軍は、さまで大勢ならずと言へども、勇気いまだ怠らず。(土井本太平記、卷三)

③これらに度々支へられて、敵さまでも追はざりければ、大将も士卒も危ふき命を助かりて (同、卷二五)

④伝奏吉田中納言宗房郷、「妖は徳に勝たず」と宣ひて、さまでも驚き給はず。(同、卷三十)

いずれも副詞の用法であつて、「さまでも」は打消を伴つてゐる。利休の場合は、打消を伴つておらず、副詞の用法ではない。日本国語大辞典によると、「毎年、二季に心づけたさうが、それでもいやか」(仮名草子・昨日は今日の物語)と、近世初期の使用例が記されていた。打消の接続助詞「までも」も「志有れば、叶わぬまでも精入るる」(口ドリゲス日本大文典、529頁)と室町末期には用いられるようになってゐる。これらとの関連から接続詞「さまでも」が存在したのかもしれない。

(2)敬語「御ーまいらす」

①密庵墨跡表具、出来条、持進候。明日面上ニ可申候。

今日雨中、袖付候て、能有間敷候へ共、御意之間、参候。又ゆかミ候者、御なをしまいらせ候。(桑田64・小松156、瓢庵山上宗二宛)

②追申候。昨日八日に大津へ御越まいらせ候。直ニ淀へ御出と申候。御陣の容易出来申候や。(桑田99、松井佐渡守康之宛)

「直してさしあげる」「送つてさしあげる」の謙讓表現である。問題は「御」の付くことである。

③御前御喜色不斜候。則、新院被仰付、院主ニ成シ被為参(成しまいらせ)、別而可有御馳走御錠候。(桑田224、島井宗叱・神谷宗湛宛)

④大納言煩よく候、よろこびまいらせ候。なをめてたき事、追々申まいらせ候へく候。(桑田240、大政所宛朱印状代筆)

⑤御やうともまいり候て申たく候へとも、まつまつ文にて申候。いづれもまいり候て申まいらせ候。(小松160、女房の中將宛)

⑥少しも御氣遣いあられそ。たやすうお仲を直しまらしようずる。(天草版イソボ物語、424頁)

⑦梢にのぼつてさえづりを以つて夏の暑さを慰めまらするところに、理不尽に殺されらるる事は何事ぞ。(同、

天草版イソポ物語の「まらす」は、「まいらす」の変化形である。このように「動詞連用形+まいらす」が通常の形式であつて、利休書簡も多くは、そうなつてゐる。「御まいらす」は誤用である。桑田忠親著作集三「戦国武将の手紙」(227頁)に、

⑧びんぎ(便宜)すこしかたく候まゝ、一ふで御申しまいらせ候。(中の丸宛毛利元就自筆状)

「御まいらす」の用例を見出した。³⁾今のところこの一例しか見付けていないが、誤用としてもごく自然な誤用である。

(3) 敬語補助動詞「ー申しまいらす」

①御自在もたせ参候。こさるのあなくつろけ候。上まであかり申しまいらせ候。(小松149、久阿老宛)

②うち(宇治)にてとうしん(同心)も候へかし。みちの事ハ、われわれなりとも、つれ候て、のほり申しまいらせ候。(小松196、万代屋宗安宛)

「申しまいらす」が動詞連用形に下接して補助動詞の働きをしている。

③やかてくかいちん(開陣)候て、御悦申しまいらせ候へく候。(側室宛毛利元就自筆書状)⁴⁾

この用例の、「言う」を意味する「申しまいらす」からの成立ではなく、「のほり申し+まいらす」から成立したものであろう。現代語の「のほりますです」のような二重の丁寧語表現に似たものであろう。

類例を探したが、なかなか見出せなかった。秀吉が長浜城主となつた天正二年、妻おねにあてた自筆書状に、

④町の年貢申しつけ候について、文くわしく拝見申しまいらせ候。

さらに桑田著作集五「太閤秀吉の手紙」(211頁)に

⑤(病気が)少しづつよく候はば、頼もしく候。いよいよ良き左右待ち申しまいらせ候。(北政所の侍女宛太閤自筆書状)

この二例を見出すことができた。すこし丁寧に表示しようとすれば、自然に出て来そうな形式である。

(4) 敬語「御ー申す」

現代語では、「お持ち申しましょう」「お呼び申します」など、「お(ご)ー申す」は通常の形式である。湯沢幸吉郎著『室町時代言語の研究』によると、「抄物ではそれ等(お(ご)の)のないのが普通である」(222頁)と報告されている。抄物以外でも、

①お望みのままに魚を捕る調儀を教え申さうずる。(天草版イソボ物語、466頁)

②この事をいかにと問わせらるれども、一人として明らめ申す者がなかったによつて、(同、434頁)

③それならは百足にかひまらせう、代物はどこで渡し申さう。(虎明本狂言「末広がり」)

④いや、程なふひがくれた、これに宿をかり申さう。(同「老武者」)

いづれも「お(こ)」を冠していない。利休書簡にも、

⑤ちん〔陣〕立にふたおきも入申候哉。(桑田14・小松15、古田織部宛)

⑥たうさの預け申事二候。やかてく取可申候間、むつかしく候共、頼入申候。(桑田17、滝本坊宛)

⑦猶面上に筆をのこし申候。(桑田18、川端道喜宛)

「お(こ)」の付かないのが通常である。しかし、その中に次のような例が見られる。

⑧三介殿〔織田信雄^{のぶかつ}〕在大坂候。度々御尋申候て、飛脚を越候間、俄に帰申候。(桑田61、淀から舟にて妙喜庵宛)

⑨直に秀吉は伊州へ御越被申候(お越し申され候)。……右旨御言伝にて申入候。(桑田53、あて名不明)

⑩極上茶五袋給候。一段過当至極候。橋立入可申候。あまり多候へ共、御持申候は、不及是非候。(桑田215、あて名不明)

「御一申す」となっている。例⑧のように自己の動作に冠して謙讓表現にするものと、例⑨⑩のように相手の動作に冠して丁寧表現にするものがある。

調査範囲は非情に狭いのであるが、当時の書状にも、

⑪ますたとの、今日御越し申候事に候。(政宗生母の侍女宛最上義光書状)

⑫先年、御心底之趣、以一通承候。其節、御返可申候を余取紛候つる間、……心静可申入存、打過候。(毛利輝元自筆記請文案)

⑬先年、御誓紙給候。則御返可申候、心静可申入存候而延引、非本意候。(毛利輝元自筆記請文案)

わずかであるが、散見できた。

虎明本狂言集にも、
⑭又のほりまらしたらは、かならずお尋申さうが、お名を何と申ぞ。(「末広がり」)

⑮お寺へもおみまい申さひで、ぶいん〔無音〕致て御ざる。(「若市」)

⑯やがてかそう〔加増〕をとらるゝと申ほどに、其時は

きつと御算用申さるゝでござらふ。(千鳥)

室町末期の話ことばにすでに現われていたとすれば、書簡の用例はそれらの影響かもしれない。

(5)敬語「お・ごーなさる・ーなさる」

現代語では、「お食べなさい」とも「食べなさい」とも言う。歴史的には「お(ご)ーなさい」の言い方が古い。

「ーなさい」の早い例は、東国方言で書かれた「雑兵物語」(明暦・天和年間一六五五―八三)であらう。

①今時のお侍衆は、馬勞ばろうのまねをして、人をだましなさると思ひなさつても、(下45才)

②人に馬をみせせいとおもひなさる所でやだうまをお数奇すけがねなさるる。(下45ウ)

ところが、利休書簡に次のような例が見られる。

③藤五郎大工を此者とすこしの間、御やとハかし可被成候く。(桑田168・小松56、至真老人宛)

「御宿は、貸しなさるべく候」と解説すれば、「ーなさる」の早い例となる。その事に疑問を持たれたのか、小松氏は「お雇やうはかし成さるべく候」と解説された。「おーなさる」となつて問題は解消する。しかし、相手に依頼する表現に「やとはかす」という卑語じみた言い方がいいのか疑問で

ある。「ーなさる」の言い方が他にもあれば、問題解決になる。

④唯今、示曲道薫兩人、夕食に來入被成候。大慶存候。
(桑田114、瀬田掃部頭宛)

「御來入らいにゅうなされ候」が通常であるが、「來入なされ候」とあつた。この一例のみである。

「信長公記」(一六〇〇)に、

⑤《織田備後殿は》尾張國中の人数にんずを御憑たのなされ、美濃国へ御乱入、(首卷)

⑥それより土岐殿は尾州へ御出で候て、信長の父の織田彈正忠を憑たのみなされ候。(首卷)⁹⁾

「御たのみなされ候」と「たのみなされ候」の両形が見られた。しかし「ーなさる」はこの一例のみで、不安が残る。

秀吉の書簡に、

⑦さいく文給はり候。御うれしく候。こなたのこと案じなされまじく候。(生母宛自筆書状)

桑田忠親著作集五「太閤秀吉の手紙」(240頁)に所収されたものであるが、写真版が付載されており、「御」が冠せられていない事は、確認できた。しかしその追而書には

⑧かへすくわかみ事ハ御あんしなされまじく候となつていた。「ーなさる」が共存していたとしても、「お・

「ご」を冠する言い方が圧倒的な力を有していたということであらう。

⑨ 勅使兩人をめしつれ、かうらい〈高麗〉のミヤこをミ
なく引候て、ふさんかい〈釜山海〉へ御ミかたあつミ^め
申候。今十五日ニ勅使〔押紙にて〕見得不申候。ミ
やこつき被成、からとハ無事ニ候。(文禄二年五月十五
日付、最上義光書状写)¹⁰

明の勅使謝用梓・徐一貫が文禄二年五月八日に釜山を出発し、五月十五日に名護屋に到着しており、史実のとおりである。判読できない部分があり、「ミヤこ」の解釈に苦しむが、「つき被成」により、「一なさる」の存在を確認できる。

あまりにも用例が少なく、誤記とみるのか共存とみるのか、判断しがたい。共存したとしても、「お食べなさい」の省略形である「食べなさい」と同質のものではない。いずれにしろ、利休書簡の「お宿は、貸しなさる」の解釈を完全に否定し去ることはできないであらう。

文法の面から利休書簡を見てきた、目につくのは敬語表現であった。失礼のないように丁寧にという意識が手紙を書く心理に働く。通常では見られない形式もそうした意識の影響であらう。

四

漢字の読みとか表記、仮名遣いといった表記の問題に触れておこう。紙幅の関係もあり簡略にする。誤字脱字については国語史の問題でないので割愛する。

(1) 「今度」

① 今度は、種々御懇志、難申尽候。(桑田26、塗師屋源三郎宛)

② 今度者、種々御懇、難忘存候。(桑田176、あて名不明)

③ 今度者、初午之宿ヲ借り、色々御造作過当、(桑田134、西福院宛)

④ ……書状しるし計ニ候。今度、不得^{ひま}隙、御茶不申候。御残多令存候。(桑田111、長谷川五郎兵衛宛)

⑤ 芳札過当至極令存候。仍今度、遙々雖御上洛候、手前に取紛、無音申候。(桑田178、井伊侍従直政宛)

⑥ ……無的便、延引申候。今度、遙々御下向候〔御下向に〕「小松」珍儀も無之、御残多令存候。来春可罷上

候間、其御参候て、可得御意候。(桑田15・小松14、妙喜庵功叔和尚宛)

⑦ 就宗叱儀に御札過当候。今度、無上洛候事、御残多候。

(桑田177・小松86、味閑斎宛)

「今度」の表記を「こんど」と読むか、「このたび」と読むかにまず引つ掛かった。

節用集類は、

⑧「今度^{コンド} 此度^{コトビ}」(易林本) 「今度^{コント}」(運歩色葉集) 「今^{こん}

度^ビ」(落葉集) 「此度^{コトビ}」(文明本)

「今度」はコンド、「此度」はコノタビと、読みは区別されている。にもかかわらず疑問に思ったのは、大日本古文書の伊達家文書之二を読んでからである。そこには伊達政宗などの仮名書き書状が多く所収されていた。

⑨……さてこのたびもかもう《蒲生》殿より、い
ろさまくのひやうり共御さ候けるところに、……

尚々、このたびふしきニ存て、そのくちをはやくと
まかりたち候ゆへに、……(六三九番、小少将宛伊達
政宗書状)

⑩……、からかうらひへの御さきかけ、このたびうけと
り申候。……おのくハなミにて候、このたびのしあハ
せ、おのくもなかくニ御まんそくたるへく候也。
……このたびたり申候しゆ……(六四三番、おちや
こ宛伊達政宗書状)

⑪……。又此たびも一たんの御文の美くたされ候。(六五
〇番、生母御東宛伊達政宗書状)

引用は一部にとどめたが、書簡では「このたび」が殆ど
あった。にもかかわらず、書簡の漢字表記は、「此度」もま
ま見られるが、大半は「今度」である。「今度」を「この
たび」と読んでいた可能性は高いのである。

とくに利休書簡の場合は、表現形式が類型化しており、
謝辞などのあらたまった表現で、しかも書き出しの部分に
よく用いられている。現代語の「このたび」に通じるところ
がある。「今度」は「このたび」と読むのが妥当と思う。

(2) 「見廻・見舞」

警戒や監督、見物などのために見て回ることから、挨拶
などのために訪問したり、病氣の人を訪問したりするよう
になり、見廻を「みまい」と読み、やがて「見舞」のよう
な宛字が生じた。利休書簡には、

(見廻)

①城へ御見廻事候者、晩待申候。(桑田204、末吉勘兵衛
利方便)

②留守中ハ、度々御見廻、先期面上候。(桑田249・小松
63、羽柴下総介滝川雄利宛)

③相国寺へ昨日雖致御見廻候、御他行尤候間、……罷帰
候。(桑田236、松川新宛)

(見舞)

④御門迄御見舞をハ細々申入候。(桑田 252・小松 47、松井佐渡守康之宛)

⑤殊更、煩申候節、被下御見舞、忝く候。(桑田 133、蜂須賀阿波守家政宛)

(見まい)

⑥我らへの見まい、ひんき〈便宜〉も無御座候。(小松 41、末吉勘兵衛利方宛)

⑦唯今、ミの、かミ〈美濃守〉さまへ明日 御成を見まいに参候。(小松 129、釣竿斎三好政康宛)

三通りの表記が見られたが、大部分は、「見廻」である。気になる事は、「見廻」を「みまい」のほかに、「みまはる」とも言ったのである。桑田氏は、

⑧此中も少御見廻可申と存候処に、(桑田 56、古田織部宛) ↓御みまわり申すべ

⑨城へ御見廻事候者、(桑田 204、滝川雄利宛) ↓城へ御見廻ること

この二例を「みまわる」と読まれた。

延慶本平家物語(延慶二年一三〇九年書写)には、

⑩内ニ入テ見廻リ給ヘバ、古キ障子ニ(二本)

⑪在家毎ニ見マワレドモ、怪シキ所モ無リケリ。(二本)

⑫在家ヲツクシ、二三反マデ見マワレドモ(三年)

のように「みまわる」とあつたが、「みまう」の語はなかった。「みまわる」から「みまう」に音変化した事がわかる。

しかし、室町末期に依然として「みまわる」が、存在したのであろうか。日葡辞書には「みまう」のみであった。文明本節用集にも「(見)舞^{マツ}」(見)廻^{マワス}とあつた。

⑬久しう見廻にもまいらぬ程に、見まひに参らふ。(虎明本狂言「鬼の継子」)

⑭「いかにおうぢご(祖父御)、孫共がお見廻にまいつた。……」「わごりよ達は、年寄はむつかしひと思ふて、

此ほどはみまひもせぬ、(同「さいほう」)

狂言にも「みまわる」の語はなかった。利休書簡の「見廻」は「みまい」でよいと思う。

(3)「夕食」

①唯今、示曲道薫両人、夕食に來入被成候。(桑田 114、瀬田掃部宛)

若い人は、何のためらいもなく「ゆうしょく」と読みはしないか。日葡辞書には「Yūmexi. ユウメシ」「Yūge. ユウケ」はあるが、ユウシヨクは載っていない。ユウケは、古語による詩歌語であつて、日常語ではない。ユウメシが日常語

である。念のために節用集類を参照すると、

②「^{ユフケ}夕食」(黒本本)「^{ユフケ}夕食」(易林本)「^{ユフメシ}夕食」(饅頭屋本)

「^{ユフメシ}夕食」(文明本)

やはりユウメシであった。「食」をメシと読むことは、

③壺儀ひろひ物と思^{おもは}食候へく候。(小松244、我楽斎宛)

④秘蔵之茶杓、食^{めし}置候事、忝次第二候。(小松246、あて名不明)

宛字に見られるように通常のことであった。古語には古語の読みがある事に注意してほしくて取り上げた。

このほか、「話す」の表記が「放す」であったり、「養生」の表記に「養性」があり、「鯉」が「勝魚」、「都」が「宮古」と表記されている事など取り上げたかったが割愛した。仮名遣いでは、まず「開合」の混乱がある。室町時代のオ段長音には、*ō*と*o*の二種類があった。「当時」は^{たうじ}*ŋōji*、「冬至」は^{とうじ}*ŋōji*と発音の違いが示されている。しかし、「日本ではこの二つを誤ることがある。そこで *caigōga yoi* (開合が良い) とか、*caigōga varui* (開合が悪い) とか言ふ。」(ロドリゲス著日本大文典)(二六〇四)とあり、常に気にする程に乱れていた。

利休書簡で、開合の仮名遣いが正しく守られているものを列挙する。

(開音)

一 かう (一向・icō)・かうらい (高麗・cōrai)・きやう (京・qio)・円やう (円相・yensō)・サウケ (象牙・zō-gue)・やうく (早々・sōsō)・やうち (掃地・sōgi)・しやうはん (相伴・xōban)・ロクシヤウ (緑青・rocu-xō)・たうさ (当座・tōza)・たうしん (道心・dōxin)・ちやう (丁・chō)・ひやう (評・feō)・ひやうふ (屏風・biōbu)・やうす (様子・yōsu)・さいりやう (宰領・sai-reō)

(合音)

せうあん (少庵・xō)・とうしん (同心・dōxin)・とうりう (逗留・tōriū)・へうたん (瓢箪・feōtan)・ほうあく (頬当・foate)・ほうつき (酸漿・fōzucu)・ほうろく (焙烙・fōrocū)・ようい (用意・yōi)・ひろう (披露・hiō)

合計二五例

次に混乱例を取り上げるが、筆跡の解説によって判断が違ってくるのでむずかしい。例えば、

①爰許ハ歌一首にてすます也。かやうに長き文むやうしせり。(桑田131・小松75、松井佐渡守康之宛)

桑田氏は「無用しせり」と解説された。無用は、「muyō・

むよう」であるから混乱例となる。小松氏は、「ちやうしせり」と判読され、「停止せり」と解説された。停止は、「chōji・ちやうじ」であり、開合は正しいことになる。従ってこのような疑わしいものは割愛した。

(1) 「てうほう」

① 殊にてうほうのうすへり〈薄縁〉三十、もたせ給候。

(桑田28・小松16)

② いつれもてうほうとともにて候間、うちおかすに賞翫申、
(桑田23)

「てうほう」に当たる漢字表記には二種類がある。

③ 料紙三束到来、爰許ニテ重宝此事共候。(桑田22、木下半介吉隆宛)

④ 巻物一端贈給候。爰調法二候。(桑田42・小松21、島井宗叱宛)

「重宝」は chōgo であり、「調法」は chōgo で開合の違いがある。利休が重宝に調法の宛字をしたという事は、開合を無視していることになる。しかし、節用集類を参照すると、

⑤ 「重宝 調法」(易林本・黒本本・落葉集・文明本)

「重宝 調法」(饅頭屋本) 「調法」(運歩色葉集)

このように「調法」をテウハウともテウホウとも読んだも

のがあり、利休の一方的な誤りとは言えない。

(2) 「あほう」

① 御城より夜深候て帰宅候。先々為御礼申候。あほうの名、高さふにて候。(桑田136、三主公宛)

写真が付載されており、「あほう」は確認できる。

② Ato. アハウ (阿房) vtque (虚) に同じ。愚かな人、

馬鹿者。(日葡辞書)

③ 「阿坊羅刹」(饅頭屋本・運歩色葉集)

語源については諸説あり、「阿房・阿坊」は宛字である。しかし宛字からしても開音であることは間違いない。「あほう」は開合の乱れであるのか、虎明本狂言を参考にしたい。

④ そうじておのれは、あはうじや程に、(虎明本狂言「二人袴」)

⑤ うたい舞などして、ちごにも所望する。あほうげにまふ。(同「老武者」)

⑥ おくびやうものゝ、あほうにて御ざんなり。(同「きかず座頭」)

⑦ いやくあほうじやと云てわらはれうず。(同「鈍太郎」)

「あほう」が一例で、他のすべては「あほう」と表記され

ている。「あほう」が多く存在することは、これも利休の一方的な誤りとはしがたい。

(3) 「そうさなく」

① 何にとも早舟事そうさなく候〈造作無く候〉。(桑田

155・小松 206)

小松氏も「そうさなく〈造作無く〉」と解説されている。

日葡辞書によれば、「*zosa*. ザウサ」で、開音である。節用集類も「造作」(易林本・饅頭屋本・文明本など)と、すべて開音に表記されている。虎明本狂言でも、

⑧ なにのざうざ〈造作〉もなひ事じやよ。(「鶏聲」)

⑨ 思ひのほか、なんのざうさへ〈造作〉もなふ、一刀にてしとめて御さる。(「武悪」)

いずれも開音で表記されている。利休の「そうさ」は、開合の誤りと認められる。

(4) 「しんろう」

① 返々昨日御しんろうめつらしからず候。(小松 192、川端道喜宛)

図版からも「しんろう」は間違いない。漢字には「辛勞」が相当する。日葡辞書は「*ximô*. シンラウ (辛勞)」とあり、

開音である。節用集類もすべて「*シンラウ*」とあり、開音である。

② サモにおいて人の被官となつて、いろいろの辛勞 (*ximô*) を仕るところで、(天草版イソポ物語、431頁)

やはり開音であつて、利休の「しんろう」は誤りと言える。そのほか、

③ 返々貴所はたうしかたく存候。(桑田 32、末吉勘兵衛利方宛)

④ ろうき二ほん氷さたう一桶、子持かたより致進上候。(桑田 6、あて名不明)

「たうし」を「動じ」と解説されているが、「動じ」であれば、「*dôji*, *zuru*, *ita*. ドウジ、ズル、ジタ」と、合音になるので開合の誤りとなる。しかし付載された写真が小さくて確認できなかった。

「ろうき」は「蠟木」と解説されている。「蠟色」を「*xiô*. ラウイロ」とし、節用集類も「*xiô*」と開音であつた。

利休の「ろうき」は誤りとなるが、図版がなく、確認できなかった。

利休書簡における開合の混乱は、確実なもので、「造作」と「辛勞」の二例であつた。不確実なものを入れて、四、五例というところである。

大日本古文書の家わけの中から毛利家、伊達家、小早川

家、鳥津家之文書の五冊を対象に混乱例を調べたが、「当座↓とうさ」「鉄砲↓てつほう」「滅亡↓めつほう」「聊爾↓りやうし」とした四例のみであった。

虎明本狂言台本の書写は、利休死後五十年が経過しており、書物の性格も読むことが目的ではなく、演ずるための台本である。それと比較することは無謀であるが、参考までに脇狂言三二曲を調べると、混乱例は、「棒↓ほう」「早う↓はよう」「廃忘↓はいもう」の三例であった。それでも開合の混乱は防ぎきれなかったようで、「取つてこう」「すしをはうばつて」「御かさう〈加増〉」と訂正している。利休の混乱例の二または四語は、多くはなくやむを得ないものであったと言えよう。

「じ・ぢ・ず・づ」のいわゆる四つ仮名の混乱も、室町末期には常態化していた。日本語の教科書として作成された「天草版平家物語」でも、「ぢgi」「じji」の混乱は、六種類、延べ五十語にも及んでいる。虎明本の脇狂言にも十例もの混乱例が認められる。しかし、利休書簡には混乱例は、一例も見当たらなかった。

合拗音の直音化という現象もある。「浮世風呂」に京女が江戸言葉を揶揄して、「けたいな詞つきじやなア。お慮外も、おりよげへ。観音さまも、かんのんさま。なんのこつ

ちやろな」(二の上)と言っている。「くわ」を「か」と発音する現象である。日葡辞書にも、「Gooc. ゴカウ(後光) 仏の頭の回りに描いたり、取り付けたりしてある光の筋、または、光輪「光背」。文字では、Gogyo(くくわう)と書かれるけれども、話し言葉では、Gooc(いかう)と発音される」として、直音化することがあることを記している。桃源瑞仙の「三体詩抄」(室町中期)にも、「下劣ノモノガ観音ト云タリ、正月二月ハ却テ直音ニカナウテヨイゾ」と記し、教養のない人が、観音をカン、正月、二月をガチと直音化することを明らかにしている。

利休書簡では、「くはん(鑑)」「カンクワイ(顔回)」「しやうくはん(賞翫)」など合拗音が正しく守られている。問題になるのは、次の二例である。

①利休めはとかくみやうか〈冥加〉のものそかし かん
せうしやう〈菅丞相〓菅原道真〉になるそとおもへ
は (桑田263 利休自筆辞世の和歌)

②只今殿下様御出ニテ候間、面へやかてく御出候て、
口をたゝき候て可被下候。忝可存候。いまた少々あひ
かん計候。(桑田191、芝山監物宗綱宛)

「あひかん」について桑田氏は「哀願」と解釈された。それであれば「あいぐわん」が正しいので、直音化が二例見

られることになる。

しかし「菅丞相」については、

③「菅丞相の歌」(Canxôjono via) (ロドリゲス大文典)

④かんせうじやう〈菅丞相〉よにこえ、りこん〈利根〉

第一の御かたなれば、(虎明本狂言「うるさし」)[※]九例

とも「かんせうじやう」と表記。

直音化の例が多く見られる。切腹を前にして利休が錯乱して誤ったのではなからう。直音化が一般的であった。

もう一例の「あひかん」であるが、「哀願」の語は、日葡辞書にも節用集類にも見られない。また、室町時代の資料にも使用された形跡がない。「哀願」と解釈するのは無理ではなからうか。むしろ「哀憾」(アイカン) (文明本節用集) を当ててはどうか。

以上、利休書簡の開合・四つ仮名・合拗音の直音化について調べたが、誤りは殆どなかった。学識のある人物であることが知られた。

このほか、「のこう(拭う)」が「ぬぐう」「前」が「まい」、「手伝」が「てちたい」「紐」が「ひぼ」となっていることなども取り上げたかったが、割愛した。

長時間、退屈な話をご静聴くださり感謝申し上げます。

日本語の歴史に関心を持ってくださることを念願して終わ

りします。

(一九九九年四月二十八日の講演に手を加え、補充した。)

注

(1) 『室町時代語資料による基本語詞の研究』(武蔵野書院)

(2) 同右

(3) 大日本古文書、毛利家文書を調べたが見付けることができなかった。「さしたる御事候ハねとも、よきひんきにて候

ま、一ふて申上まいらせ候。(隆元夫人宛毛利元就自筆書状)(毛利家文書之二・五九八番) など、「御」の付かない例ばかりであった。

(4) 大日本古文書、毛利家文書之二・六〇一番

(5) 「御持被申候は、」が正しいかと思われる。桑田氏による「自筆ではなく、古い写しと思われる。筆力の弱さが問題である。」との説明がある。

(6) 大日本古文書、伊達家文書之一・三二六番

(7) 大日本古文書、毛利家文書之一・三六二番

(8) 同・三六三番

(9) 陽明文庫本を底本にし、読み下し文にした角川文庫によった。史籍集覧本によれば

「国中の人数を被成御憑、美濃国へ御乱入」

「信長之父織田弾正忠を憑みなされ候」

とあった。自筆の池田本「信長記」は、首卷を欠くので確認できない。

(10) 大日本古文書、伊達家文書之二・六四七番